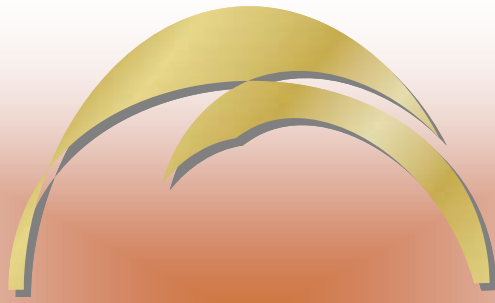




Messidor Ensemble

メシドール・アンサンブル演奏会

2009年11月22日(日)

ティアラこうとう 小ホール

メシドール・アンサンブル演奏会

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト フルート四重奏曲 第一番 二長調 K.285 *

第一楽章 *Allegro*

第二楽章 *Adagio*

第三楽章 *Rondeau: Allegretto*

フランシス・プーランク ピアノと管楽器のための六重奏曲

第一楽章 *Allegro vivace*

第二楽章 *Divertissement: Andantino*

第三楽章 *Finale: Prestissimo*

————— 休憩（10 分間） —————

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー 弦楽六重奏曲 二短調 作品70 「フィレンツェの思い出」

第一楽章 *Allegro con spirito*

第二楽章 *Adagio cantabile e con moto*

第三楽章 *Allegretto moderato*

第四楽章 *Allegro vivace*

金井 麻子：フルート	勝部弓理子：1st ヴァイオリン
吉川菜津子：オーボエ	室田亜希子：2nd ヴァイオリン
金内 智恵：クラリネット	竹島 愛弓：1st ヴィオラ *ヴァイオリン
布施 雅章：ファゴット	林 俊夫：2nd ヴィオラ *ヴィオラ
田中 秀樹：ホルン	坂本謙太郎：1st チェロ *チェロ
大月 礼子：ピアノ	室 裕文：2nd チェロ

2009 年 11 月 22 日(日) 19 時 00 分 開演
ティアラこうとう 小ホール

この演奏会に当って齋藤純一郎先生にご指導を頂きました
この場を借りて御礼申し上げます

手塚治虫は絶筆となった『ルードウィヒ・B』の中でモーツァルトにこう語らせている。「ベートーヴェン君、ぼくはね、心の中にひらめいたメロディが神の啓示と思っているんだ。だからぼくは一気に書き上げないかぎり、その作品はボツにして忘れてしまおうんだ」。それに対して若きベートーヴェンはこう応える。「ぼくはそうは思いません。長いこと練ったっていいものはできます」。

別の場面では、ベートーヴェンはモーツァルトを評して、ハイドンにこう言う。「あの人の曲想は軽すぎます！ テーマに重みがありません。その点ハイドン先生の交響曲は重厚で、哲学的です。ぼくは人生の深い憂いや喜びを曲にしたいのです！！」

この会話の真偽の程は・・・おそらく「偽」だろう。しかし、西洋音楽が二つの大河に分岐する様子を、これほど鮮やかに描いた例も珍しい。

19世紀以降のドイツ～ここではオーストリアを含むドイツ語圏、いわゆる大ドイツである～の作曲家は、ハイドン(1732-1809)・ベートーヴェン(1770-1827)の路線をひた走って行く。ブラームス、ヴァーグナー両派に分かれた意見対立のときも、哲学的な思索を創作の根幹に置き、重厚な音楽を志向する姿勢は、ドイツ音楽界で共有されていた。ヴァーグナー(1813-83)やR.シュトラウス(1864-1949)のオペラ・楽劇、ブラームス(1833-97)やマーラー(1860-1911)の交響曲を思い浮かべれば容易に想像出来るように、彼らの作品は神の啓示に従って一気に書き上げるというような代物

では決してない。むしろ、理性を駆使して、練りに練った産物である。

彼らの取り組みが、クラシック音楽におけるドイツの絶対的な地位を築いたことは確かだ。一方で、音楽を難解にし、その寿命を縮めたという側面も否めない。モチーフを理性によって分解し、展開していくと、旋律は短く、判りにくくなる。その萌芽はベートーヴェンの交響曲第三番『英雄』(1804)第一楽章の展開部に早くも認められる。80年を経たブラームスの交響曲第四番(1885)の冒頭～いわゆる溜め息のモチーフの部分～で、旋律はたった2音という最小単位になり、シェーンベルク(1874-1951)の無調音楽(1908)に至っては、常人が一聴して旋律を認識し、記憶することは困難になる。

さて、もう一方の大河も見てみよう。軽快な旋律をあっさりと扱うことを好むモーツァルト(1756-91)・・・その後継者はドイツではなく、イタリア、フランス、ロシアに見出すことができる。ヴェルディ(1813-1901)やプッチーニ(1858-1924)、レスピーギ(1879-1936)らの作品を聴けば、イタリアでは20世紀を迎えてからも、明快で、耳馴染みのよい旋律を持った音楽が高く評価されていたことが分かる。

同様にフランスでも、ドビュッシー(1862-1918)やラヴェル(1875-1937)は、和声の面では相当に前衛的な試みをしているが、明快さ、簡潔さを保ち、聴衆が無防備に楽しむことを許す。オネゲル(1892-1955)、ミヨー(1892-1974)らは「フランス六人組」を名乗

り、1920 年代以降も全音階（ドレミファソラシド）による解りやすい旋律を求めた。六人組の最年少メンバーだったプーランク（1899-1963）が同時代人に「モーツァルトの再来」と評され、後に「メロディを持つ 20 世紀最後の作曲家」と呼ばれたことから、この大河の流れついた先を知ることが出来る。

ロシアの作曲家たちも、やはり旋律を重視するという点でモーツァルトの系譜に連なると言える。例えば、同国最初の大作曲家チャイコフスキー（1840-93）は生涯を通じて「ベートーヴェンの後継者たちの毒」を嫌い、モーツァルトに範を求めた。もっとも、その事情はイタリア・フランスとはやや異なる。ロシアは 19 世紀後半になってやっと職業音楽家が登場した位の音楽後進国だったため、ドイツ・ロマン派風の重厚で哲学的な音楽を受け入れる聴衆が育っていなかった。また、ボロディン（1833-87）らロシア五人組が典型だが、ドイツの真似をするだけの作曲技術が無かったという事情もある。一方、民族主義の高まりを受けて、民謡を自作に取り入れることには、五人組・チャイコフスキーとも積極的で、それゆえ自ずと旋律を重視する作風になったというのも一面の真実である。

様々な事情はあったにせよ、これらの国々では旋律を大切にし、素のまま用いることを良しとするモーツァルトの考え方が受け継がれ、20 世紀半ばまで尊重された。ドイツ音楽は 19 世紀後半を通じて、聴き手に要求する音楽的知識や分析能力のレベルを上

げて行き、20 世紀に入る頃には相当な割合の聴衆を拒絶するようになったが、周辺諸国の作曲家は、もう少し寛容だった。その結果、フランス・ロシアではメシアン（1908-92）やブーレーズ（1925-）が活躍を始める第二次世界大戦後まで、ドイツよりも半世紀長く、同時代の音楽が一般の聴衆に受け入れられ続けたのである。

モーツァルト

フルート四重奏曲 第一番 二長調

ベートーヴェンの後継者たちにとって、フルートはオーケストラに彩りを添える装飾材料であり、独奏楽器ではなかった。ドイツ系の重厚・哲学的な音楽と、軽快で華やかなフルートの音色を考えれば、無理からぬことであろう。反対に、モーツァルト系の音楽とフルートは極めて親和性が高い。現代のフルート奏者のレパートリーが、モーツァルトや近代以降のフランスの作品に偏っているのは、そういう意味で至極当然のことなのである。

モーツァルトは、フルートのために協奏曲 2 曲、ハープとの二重協奏曲 1 曲、四重奏曲 4 曲を残しているが、どれをとっても天衣無縫。「神の啓示を一気に書き留めた」という表現は言えて妙である。

ブラームスが「天空に高々と昇る星」と評したように、ドイツの作曲家もモーツァルトに十分な敬意を払っていた。にも関わらず踏襲しようとはしなかったのだが、これらの曲を聴くと「出来なかった」と表現すべきかも知れない、と思えてくる。

プーランク

ピアノと管楽器のための六重奏曲

ハイドン～ベートーヴェンに連なるドイツ・ロマン派の作曲家たちが重厚で哲学的な音楽を追求したのに対して、その対極に位置するのがプーランクだ。パリの街角のカフェ・テーブルで、街行くお洒落な人々を眺めながらサラサラっと即興的に書いたかのような雰囲気の特徴である。

プーランクは、しばしば作曲技術が稚拙だ、脈絡がない、途切れ途切れだなどと批判をされる。しかし、ドイツ音楽が無調音楽まで辿り着き、行き詰っていた時代背景を考え併せると、暗い部屋で熟考を重ねるドイツの作曲家を嘲笑うために、彼が敢えてそう書いているようにも聴こえるのである。「何悩んでるの？聴衆を喜ばすのは、こんなに簡単じゃない」と言わんばかりに・・・。

チャイコフスキー

弦楽六重奏曲 二短調

「フィレンツェの思い出」

チャイコフスキーはおそらく音楽学校で学び、成功した史上初の作曲家である。ロシア正教会が聖堂での楽器の使用を禁じていたため、ロシアには19世紀半ばまで職業音楽家はほとんど存在しなかった。家庭やコミュニティで幼少から専門的な音楽教育を受けることが出来た西欧の音楽家と異なり、彼は22歳になってから設立されたばかりのペテルブルグ音楽院で初めて専門教育を受けたのである。

それでも数年早くに生まれたが故に専門教育を受ける機会に恵まれなかったロシア五人組に比べれば、彼は幸運だった。遅ればせではあったが、ドイツの重厚で複雑な音楽の基礎となる対位法や和声法などの作曲技術を体系的に学び、習得することができたのだから。しかし、チャイコフスキーは決してその技術に溺れることはなかった。技術を駆使しつつも、息の長い旋律を、気持ちよく聴かせることを、彼が決して忘れなかったことは、この曲がはっきりと示している。

なお、本日の演奏では、楽器が左側から総譜に記載されている順に並んでいる。弦楽六重奏の配置としては変則的だが、これによってチャイコフスキーの旋律美と同時に、複雑な対位法を視覚的に楽しんでいただくこともできるだろう。

最後に「フィレンツェの思い出」という副題にも触れておこう。彼はこの曲を1890年のフィレンツェ滞在後に仕上げたが、ここで回想されているのは、パトロンのメック夫人の招きによる1878年の同地滞在と思しい。その平穏で優雅な日々を、彼はよほど楽しんだらしく、その後の夫人との文通でもこれに一度ならず触れている。

ドイツ音楽の表題は、手塚治虫がベートーヴェンに言わせた通り「人生の深い憂いや喜び」の表現につながりやすいが、この曲の副題にそのような重大な意味はない。「楽しかったフィレンツェでの日々の思い出に捧ぐ」という程度に捉えて、純粹に旋律を楽しむというのが、モーツァルトの後継者たちに対する適切な接し方だろう。

メシドール・アンサンブル

「メシドール」とはフランス革命暦にある月の名前の一つで、現在の6月19日から7月18日に相当します。第一回演奏会の開催日、そこで取り上げた二曲の作曲時期が全てメシドールの一ヶ月に収まっていたため、グループ名としました。

メシドール・アンサンブルは演奏会のたびに いくつか演奏したいと思っていた曲 を携えた有志が集う緩やかな集団です。社会人、学生、主婦、職業音楽家まで幅広いメンバーで構成されています。2002年以来9回の自主公演を開いているほか、音楽祭・依頼公演にも対応していますが、そのたびに取り上げる曲の楽器編成も、メンバーの顔ぶれも毎回変わっています。今後の演奏会にもご期待ください。

なお、出演者のプロフィール・今後の活動に関しては、当団のウェブサイト (<http://messidor.hp.infoseek.co.jp>) にてご覧頂くことができます。

これまでの演奏会

第一回（2002年7月13日 於：新宿文化センター 小ホール）

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第一番 二短調 Op.49（フルート版）

ブラームス：クラリネット五重奏曲 口短調 Op.115

第二回（2003年7月6日 於：幕張ベイタウンコア 音楽ホール）

ハイドン：弦楽四重奏曲 二短調「五度」Op.76-2

ビゼー／シンプソン：フルート・チェロ・ピアノのためのカルメン幻想曲

ドヴォルジャーク：弦楽四重奏曲 ヘ長調「アメリカ」Op.96

第三回（2004年2月15日 於：新宿文化センター 小ホール）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第一番 二長調 K.285

オーボエ四重奏曲 ヘ長調 K.370

アダージョとロンド ハ短調 K.617

ピアノ四重奏曲 第一番 ト短調 K.478

第四回（2004年11月20日 於：ティアラこうとう 小ホール）

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 第一番 変ホ長調 Op.12

キュフナー（伝ウェーバー）：クラリネット五重奏のための 序奏、主題と変奏

シューベルト：ピアノ五重奏曲 イ長調「鱒」Op.114

第五回（2005年7月10日 於：ティアラこうとう 小ホール）

ヴォルフ：イタリアのセレナーデ ト長調

モーツァルト／ヴェント：フルート四重奏のための『魔笛』より抜粋

チャイコフスキー：弦楽四重奏曲 第一番 二長調 Op.11

房音くらぶ 音楽祭 (2005 年 8 月 20 日 於：南総文化ホール 小ホール)

モーツァルト：弦楽五重奏曲 第 4 番 ト短調 K.516 より第一楽章

第六回 (2006 年 4 月 30 日 於：ティアラこうとう 小ホール)

モーツァルト / ロットラー：木管五重奏曲 八短調

ベートーヴェン：七重奏曲 変ホ長調 Op.20

クリスマス・コンサート (2006 年 12 月 17 日 於：西千葉 カフェ・エラブル)

モーツァルト：フルート四重奏曲 第一番 二長調 K.285

ヴィヴァルディ：『四季』より「冬」

第七回 (2007 年 5 月 13 日 於：ティアラこうとう 小ホール)

ベートーヴェン：アダージョとロンド (六重奏曲 変ホ長調 Op.81b より)

ボロディン：弦楽四重奏曲 第二番 二長調

モーツァルト：ディヴェルティメント 第十七番 二長調 K.334

第八回 (2008 年 6 月 29 日 於：ティアラこうとう 小ホール)

バッハ：管弦楽組曲 第二番 口短調 BWV1067

シューベルト：八重奏曲 ヘ長調 D.803

美浜音楽祭 (2009 年 3 月 21 日 於：幕張ベイタウンコア 音楽ホール)

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第一番 二短調 Op.49 (フルート版)

第九回 (2009 年 6 月 21 日 於：ティアラこうとう 小ホール)

シェーンベルク：浄夜 (弦楽六重奏版) Op.4

ブラームス：弦楽六重奏曲 第一番 変ロ長調 Op.18

メシドール・アンサンブル 第 11 回演奏会

with Ayumi's mini mini Birthday Reception after the Concert

2010 年 7 月 3 日 (土) 19:00 開演

於：ティアラこうとう (都営新宿線/半蔵門線 住吉駅)

ラインベルガー：九重奏曲 変ホ長調 Op.139 他

座席当日指定 1000 円

2009 年 12 月 1 日 先行予約受付開始

messidor_ensemble@yahoo.co.uk 宛の電子メールで

お名前・ご住所・電話番号・Eメールアドレスを

お知らせください



